

また、資金集めと世の中の情勢を探るために、丈夫な真田紐を織り、家来に諸国を売り歩かせたと伝えられています。

1611年、配流から11年、再起の夢虚しく、昌幸が病没します。享年65歳。幸村は境内に昌幸を弔い、供養塔を建立しています。

### 大坂城へ向けいざ出陣！

時は流れて1614年(慶長19年)春、豊臣秀頼から招聘の使者が幸村の庵を訪ねました。「この度、我等は徳川氏を滅ぼさんかため兵を挙げることになつた。ついては、幸村殿にも力を貸して頂きたい。」

「承知いたしました。秀吉公の恩義に報いるためにも、喜んで協力いたします。」

幸村は大助と共に地元の人々の協力も得て14年間暮らした九度山を後にします。

### 強い決意の証、「赤備え」

大坂冬の陣が始まる時、幸村は隊の重装を「赤備え」に決め、具足、旗差物などあらゆる武具を朱塗りになります。このころ、赤備えは甲斐武田軍の代名詞で、精鋭部隊の証であったことから、戦場で自立し赤で隊の結束と武勇を示したとされています。幸村はまず、大坂城南側の最も重要な地点に出丸を築き空堀をめぐらせ、二重三重の構えで敵を迎え討ちます。これが「真田丸」です。

戦術を尽くして徳川軍を悩ませ、一旦は和睦が成立したものの、大坂城の本丸を残して外堀を埋めるといのが和睦の条件でした。外堀は真田丸を含め短期間に壊平工事が完了し、再び夏の陣が起こります。大坂城は守りもままならず、兵士たちの気力も限界に達していた中、幸村が兵の士気を高めるも苦戦。幸村は決死の覚悟で家康に狙いを定め、丸となって突撃します。その勢いはあわや本陣に迫る凄まじさで、家康に死をも覚悟させます。

しかし茶臼山附近での激戦の末、幸村は壮絶な最期を遂げました。享年49歳。

「幸村の戦いぶりは敵ながらあつぱれであった」と、かの家康に言わしめた幸村の武勇伝は後世に語り継がれることとなったのです。

真田幸村(信繁)の生涯		
永禄10年 1567	真田昌幸(父)、山手殿(母)の次男として生まれる。	
天正元年 1573	武田信玄、死去(53歳)。信玄の四男勝頼が家督を継ぐ	
天正3年 1575	長篠の合戦 武田勝頼が織田・徳川軍に破れる 真田信綱・昌輝の戦死後、昌幸が家督を継ぐ	
天正10年 1582	3月 勝頼自刃して武田家滅亡 4月 昌幸、織田信長に馬を贈る 6月 本能寺の変 信長、明智光秀に討たれる 7月 昌幸、北条氏に属する 8月 徳川家康と北条氏和睦 9月 昌幸、徳川家康に属する	
天正11年 1583	上田城 本丸完成、昌幸、岩櫃城より移る	真田家の家紋「結び薙金」
天正13年 1585	7月 昌幸、上杉景勝に属する 8月 幸村(19歳)人質として海津城(のちの松代城)に赴く 昌幸・幸村、上田城に襲来した徳川軍を鉄砲で応戦 幸村、景勝の春日山城から呼び戻され、豊臣秀吉の元へ赴く 北条軍、真田氏の名胡桃城を奪取	
天正17年 1589	信幸は本多忠勝(徳川方)の娘と、幸村(23歳)は大谷吉継(豊臣方)の娘と結婚	
天正18年 1590	秀吉、北条氏に宣戦布告、真田父子は小田原に参陣	
慶長3年 1598	豊臣秀吉、死去(63歳) 家康の権力が強くなり、他の大名を圧倒する	
慶長5年 1600	7月 大伏の別れ 昌幸・幸村は西軍(石田方)、信幸は東軍(徳川方)に味方する 9月 関ヶ原の戦い 三万八千余の軍勢を率いた徳川秀忠が中山道を経て信州上田城を襲撃 昌幸・幸村は二千五百の寡勢で数日秀忠軍を釘付け、武名は天下に鳴り響く 戦いは東軍徳川方の圧勝に終わり、信幸、上田城に移り、信之と改名	
慶長7年 1602	昌幸・幸村は信之の嘆願により高野山蓮華定院に監居やがて九度山に移り住む	
慶長16年 1611	父・昌幸、九度山で没す(65歳) 火葬にされ、境内に宝篋印塔を建立	
慶長19年 1614	10月 大坂冬の陣 幸村・大助ら、九度山から大坂城入城 家康、諸大名に大坂出陣を命じる。真田家からは信之の子信吉・信政が参陣 12月 幸村は天王寺口に「真田丸(砦)」築いて防守、東軍これを攻めるも退却 大坂城外堀の埋め立てを条件に和睦成立	
慶長20年 1615	4月 大坂夏の陣 家康、再び大坂城攻略を命じる 道明寺の戦いで、後藤又兵衛、薄田半人正兼相ら大坂方の勇将が討死 幸村は殿軍を守り奮戦、茶臼山から家康の本陣に突撃し 壮絶な最期を遂げる(49歳) 淀君と秀頼、炎上する大坂城で自刃、大助これに殉ずる 真田軍の勇敢な戦いぶりは「真田日本一の兵」と武名天下にとどろく	



幸村が大坂夏の陣で使用したとされる槍先 真田宝物館蔵

### 聖地・高野山へと続く祈りの道 幸村ゆかりの地 歴史文化をめぐる

- 日本一の富有柿**  
土壌や天候、地形など生育に好条件な自然の恵みを受けて、優れた品質の「日本一の富有柿」が実る九度山町。秋は柿色でいっぱいになります。
- 名物・柿の葉寿司**  
いつの頃からかお祭りの御馳走として紀の川上流地域に伝わる柿の葉寿司。民間業として知られる柿の葉で鯖寿司を包んだ風味豊かな逸品です。
- 高野山 蓮華定院**  
鎌倉時代の始め行脚上人により創建。高野山に監居を命ぜられた昌幸・幸村父子が最初に暮らした場所です。幸村の戦死後、長野市松代に移った真田家の、高野山における普賢寺となっています。明治の二度の大火を幸い免れ、その格式を今に伝える宿坊として、現在は高野山参詣者を迎えています。
- 世界遺産登録 女人高野 慈尊院**  
弘仁7年(816年)弘法大師(空海)が、高野山開創に際し、この地に伽藍を創建、高野山一山の庶務を司る政所、宿所、冬季の避寒修行の場。高野山内が女人禁制であったため、弘法大師(空海)の母公が晩年に移り住み、没後、廟堂として弥勒堂が建立されます。女人の高野山参りとして「女人高野」と呼ばれて親しまれてきました。
- 世界遺産登録 丹生官省符神社**  
弘法大師(空海)が慈尊院を開創した弘仁7年(816年)、その守り神として地元ゆかりのある丹生都比売・高野御子の二神を祀った神社。社殿三棟は木造一間社春日造、檜皮葺、極彩北面で重要文化財(建造物)に指定されています。丹生官省符神社は橋本市、かつらぎ町、九度山町の荘園の総社として栄えました。
- 世界遺産登録 高野山町石道**  
聖地・高野山への長参道である高野山町石道。町石は、慈尊院から高野山まで一町(約109メートル)ごとに建てられています。百八十基の道しるべとして、かつて弘法大師(空海)が開いたこの道を通って千二百年の歴史に思いを馳せる参詣者を導きます。

### 後世へと語り継ぐ真田三代の軌跡と物語を 九度山・真田ミュージアムで体感する。

昌幸 幸村 大助

関ヶ原の敗戦後、父昌幸とともに監居を命じられた地、九度山。真田昌幸、幸村、大助の真田三代の軌跡と14年間という幸村の生涯で一番長い時間を過ごした九度山での生活をパネル展示とドラマ仕立ての映像により紹介します。

真田ミュージアム

【お問い合わせは】  
九度山・真田ミュージアム  
和歌山県伊都郡九度山町九度山1452-4  
TEL.0736-54-2727 FAX.0736-54-2737  
http://www.kudoyama-sanadamaru.jp

### 九度山町観光に関するお問い合わせは 九度山町産業振興課

〒648-0198  
和歌山県伊都郡九度山町九度山1190  
http://www.town.kudoyama.wakayama.jp/  
TEL. 0736-54-2019  
FAX. 0736-54-2022

# 幸村

KUDOYAMA

# いざ、決戦の地へ



真田三代ゆかりの里・九度山町

## 戦国時代最後の武将・真田幸村

戦国時代最後のヒーロー・真田幸村は、関ヶ原の戦いのもと、父昌幸とともに紀州九度山で14年もの隠棲生活を送っています。そこに至るまで、九度山を出て決戦の地・大坂城に向かうことになる幸村の、武将としての人生をご紹介します。



### 「六文銭」の由来

1567年(永禄十年)、武田氏に仕える後の信濃国上田城主真田昌幸に、二人目の男の子が誕生。これが後の真田幸村(信繁)です。

1582年(天正十年)、武田勢は、天目山の戦いに破れ、信玄の子勝頼も自刃。これにより主君である武田家は滅亡し、昌幸の軍も上田城に引き返すことになりました。ところがその途中、四万余の北条軍に遭遇してしまつたのです。

「わが軍はわずか三百。これでは到底勝ち目がない。さてどうしたものか」  
思案に暮れる昌幸の前に、当時15才の幸村が進み出ました。

「父上、私によい考えがあります。私に紋のない旗をお与え下さい」

幸村は六本の無紋の旗に、北条方の武将松田尾張守の旗印(永楽通宝)を描いて兵に持たせ、軍を六隊に分けて闇討ちをかけた。北条方は味方の松田が謀反を起こしたと勘違いし大混乱。それに紛れて真田勢

# 日本一の兵

ひのもとしち つむもの

「日本一の兵」大坂の陣で武神・幸村に心を動かされた島津家久が故郷への手紙に記した幸村を讃える言葉



真田幸村画像 上田市立博物館蔵

は無事上田城に帰り着くのです。ときにこれが幸村の初陣となりました。「でかしたぞ。幸村、これにちなんでそなたの旗印には六つの銭を描くがよい」  
こうして、幸村は誰もが知る英雄の旗印「六文銭」を持つことになったのです。

### 関ヶ原の戦い

天目山の戦の後、真田氏は徳川氏に仕えました。北条氏との和睦の件で家康と対立し第一次上田合戦が起こりました。

その後、豊田秀吉の臣家に入り家康と和解しますが、秀吉の死後、関ヶ原の戦いにおいて昌幸・幸村は豊臣方、信幸は徳川方に組み、三人は敵として争うことになりました。1600年(慶長5年)、家康は天下取り

に向けて進軍、同年7月、石田三成が挙兵。東軍(徳川)と西軍(石田)の関ヶ原の戦いが始まります。幸村は父と共に西軍に加わり、上田城にあって徳川秀忠軍の西上を阻止。秀忠は関ヶ原の戦いに合いませんでした。昌幸、幸村父子が奮闘したにも関わらず、肝心の関ヶ原で西軍は敗退してしまします。

### 西軍の敗戦、そして高野山へ

昌幸、幸村父子は家康により当然死罪に処せられるところであったのを、東軍についていた兄信幸と本多忠勝の嘆願により、特別としてこれを免れます。

「真田昌幸とその子幸村に、所領没収ならびに高野山監居を命じる」  
これに従い同年10月9日、昌幸、幸村父子は

### 九度山での隠棲生活

蓮華定院に身をよせて間もなく妻子との生活を許された昌幸、幸村父子は、その年の冬に庵を高野山から麓の九度山に移しました。その跡地に建つのが善名称院ぜんみょうじょういん、真田庵です。

ここでは、信之からの仕送りに頼って生活を送っていたようです。「焼酎を送ってほしい、途中でこぼれないようにしっかり蓋をして」といった幸村の手紙も残されています。

# そして幸村は伝説となる

## くどやまと真田十勇士

「真田日本一の兵古よりの物語にもこれなき由」  
大坂の陣での活躍により、幸村の生き様はドラマチックに伝えられました。真田十勇士は、九度山に蟄居中の幸村のために集まった右腕たち。江戸時代より史実を参考に生まれた壮大な戦国物語です。

### 真田まつり 個性あふれる真田十勇士



**猿飛佐助** さるびさけ  
真田十勇士の中で最も人気のある甲賀流忍者。狩りをしに来た幸村にその能力を認められ家臣となる。幸村が九度山に落ちた大坂夏の陣で旅をしながら仲間と出逢っていく。

**霧隠才蔵** きりかづき  
伊賀流の達人。父浅井長政の家臣。浅井家再興の資金集めのため山賊となるが、仲間集めの旅をしている猿飛佐助と出逢い、忍び仕へて対決のち仲間となる。

**海野六郎** うんのろろう  
真田氏の重臣であった野村出身の武士。十勇士の中では最も古参。仲間を陰謀で殺される幸村の右衛門守役として大坂夏の陣で徳川方に突入した先鋒部隊のひとり。

**穴山小助** あなまこすけ  
武田家家臣出身の武士。武田家滅亡後父が小助を連れ駒場を渡り歩く浪人となり、幸村の郎党となる。幸村と共に九度山に落ちた大坂夏の陣で家康の本陣に切り込み、最後を遂げる。

**三好清海入道** みよせいかいねんろう  
真田十勇士の中で最年長の武士。浪人時代に親戚である真田氏を頼り家臣に。僧侶の姿で重い鉄棒を振り回す豪傑。大坂夏の陣で弟と共に徳川父子を討つとして敵し切腹する。

**三好伊三入道** みよせいざねんろう  
由利鎌之助と共に鈴鹿山中で山賊になっていたとく兄である三好清海入道の誘いを受け、幸村の家臣に。大坂夏の陣で兄と共に徳川父子を討つとして敵し切腹する。

**望月六郎** もつぎろろう  
忍術を使い、大筒や地雷火といった火薬武器の製造使用を得る。甲賀流忍者。九度山真田屋敷の前守居役として幸村の近くで生活していたとく兄である三好清海入道の誘いを受け、幸村の家臣に。大坂夏の陣で徳川父子を討つとして敵し切腹する。

**根津甚八** ねつじんぱち  
元海賊の頭領。幸村が丸亀水軍の動きを探りに出かけた中で出会い、家来となる。由利鎌之助と仲間を結んで大坂夏の陣で徳川父子を討つとして敵し切腹する。

**由利鎌之助** ゆりかますけ  
鈴鹿山中で山賊していた鎌之助の達人。伊三入道と共に幸村の家臣に。鎌之助を振り回し敵をなぎ倒す豪傑であり、槍の達人でもある。大坂夏の陣で海野六郎とは別部隊で活躍する。

**八雲** やぐら  
由利鎌之助の妹。幸村の郎党として活躍する。

**霧隠才蔵** きりかづき  
伊賀流の達人。父浅井長政の家臣。浅井家再興の資金集めのため山賊となるが、仲間集めの旅をしている猿飛佐助と出逢い、忍び仕へて対決のち仲間となる。



# 歴史と文化のまちに息づく幸村の面影を訪ねて。

真田父子のさまざまなエピソードが九度山町に残されています

## 春には大輪のボタンが咲き誇る、幸村の屋敷跡

### 真田庵(善名称院)

門や瓦には旗印の六文銭・戦乱の世を生きた名將・幸村が再起を果たすまでの静かな時間がここにある。



いたるところに六文銭が... 西の門の扉には真田家の家紋「結び雁金」 父・昌幸の墓

善名称院、真田庵とも呼ばれ、真田昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられたお寺です。本尊に延命子安地藏菩薩を祀り、かつてはお地藏さんとして賑わいをみせたこともあったそうです。毎年春にはボタンが咲き乱れ、真田昌幸・幸村父子を偲んで開催されている「真田まつり」では総勢500名の武者行列のゴール地点として賑わいをみせています。

高野山に蟄居(ちつきよ)を命じられ、信州より、紀州へとやってきた真田昌幸・幸村父子は、のちに妻子とともに九度山で暮らし、昌幸はこの地で亡くなります。息子である幸村は、父の供養のために森の中に宝篋印塔を建て、その後、大坂上人がこの森に来たときは、本尊がここに寺を建てよと言われ、大坂は松の木だけを残してこの善名称院を建立したといわれています。

また、境内には幸村の九度山での人生を詠んだ、与謝蕪村の句碑が残されています。

善名称院、真田庵とも呼ばれ、真田昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられたお寺です。本尊に延命子安地藏菩薩を祀り、かつてはお地藏さんとして賑わいをみせたこともあったそうです。毎年春にはボタンが咲き乱れ、真田昌幸・幸村父子を偲んで開催されている「真田まつり」では総勢500名の武者行列のゴール地点として賑わいをみせています。

高野山に蟄居(ちつきよ)を命じられ、信州より、紀州へとやってきた真田昌幸・幸村父子は、のちに妻子とともに九度山で暮らし、昌幸はこの地で亡くなります。息子である幸村は、父の供養のために森の中に宝篋印塔を建て、その後、大坂上人がこの森に来たときは、本尊がここに寺を建てよと言われ、大坂は松の木だけを残してこの善名称院を建立したといわれています。

また、境内には幸村の九度山での人生を詠んだ、与謝蕪村の句碑が残されています。

善名称院、真田庵とも呼ばれ、真田昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられたお寺です。本尊に延命子安地藏菩薩を祀り、かつてはお地藏さんとして賑わいをみせたこともあったそうです。毎年春にはボタンが咲き乱れ、真田昌幸・幸村父子を偲んで開催されている「真田まつり」では総勢500名の武者行列のゴール地点として賑わいをみせています。

高野山に蟄居(ちつきよ)を命じられ、信州より、紀州へとやってきた真田昌幸・幸村父子は、のちに妻子とともに九度山で暮らし、昌幸はこの地で亡くなります。息子である幸村は、父の供養のために森の中に宝篋印塔を建て、その後、大坂上人がこの森に来たときは、本尊がここに寺を建てよと言われ、大坂は松の木だけを残してこの善名称院を建立したといわれています。

また、境内には幸村の九度山での人生を詠んだ、与謝蕪村の句碑が残されています。

善名称院、真田庵とも呼ばれ、真田昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられたお寺です。本尊に延命子安地藏菩薩を祀り、かつてはお地藏さんとして賑わいをみせたこともあったそうです。毎年春にはボタンが咲き乱れ、真田昌幸・幸村父子を偲んで開催されている「真田まつり」では総勢500名の武者行列のゴール地点として賑わいをみせています。

高野山に蟄居(ちつきよ)を命じられ、信州より、紀州へとやってきた真田昌幸・幸村父子は、のちに妻子とともに九度山で暮らし、昌幸はこの地で亡くなります。息子である幸村は、父の供養のために森の中に宝篋印塔を建て、その後、大坂上人がこの森に来たときは、本尊がここに寺を建てよと言われ、大坂は松の木だけを残してこの善名称院を建立したといわれています。

また、境内には幸村の九度山での人生を詠んだ、与謝蕪村の句碑が残されています。

善名称院、真田庵とも呼ばれ、真田昌幸・幸村父子の屋敷跡に建てられたお寺です。本尊に延命子安地藏菩薩を祀り、かつてはお地藏さんとして賑わいをみせたこともあったそうです。毎年春にはボタンが咲き乱れ、真田昌幸・幸村父子を偲んで開催されている「真田まつり」では総勢500名の武者行列のゴール地点として賑わいをみせています。

高野山に蟄居(ちつきよ)を命じられ、信州より、紀州へとやってきた真田昌幸・幸村父子は、のちに妻子とともに九度山で暮らし、昌幸はこの地で亡くなります。息子である幸村は、父の供養のために森の中に宝篋印塔を建て、その後、大坂上人がこの森に来たときは、本尊がここに寺を建てよと言われ、大坂は松の木だけを残してこの善名称院を建立したといわれています。

## 真田ゆかりの貴重な品々を所蔵

### 真田宝物資料館

昌幸・幸村の九度山での生活をテーマに真田紐や高野紙の製造用具なども展示。

真田庵の境内にある、長屋門形式、土蔵作りの資料館。中には、幸村が愛用したと伝えられる槍先や鎧などの武器や書状、真田紐などが数多く展示され、在りし日の真田一族の面影をしのばせています。真田家に関するもの以外に、当時お泊りになった天皇のものや、大坂上人に関するものなども展示されています。

入館料：200円(団体でご住職の案内を希望される場合は300円※要予約) 開館時間：午前9時～午後4時(年末年始以外無休)

# 九度山まちなか真田のみち

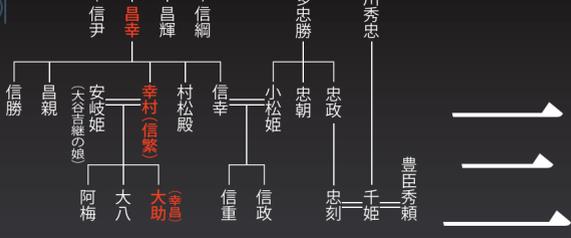
エリアマップ



九度山まちなか真田のみち  
エリアマップ

# 戦国武将真田三代の決意

くどやまと真田氏



一族を分かち知略を尽くして戦ったあと...  
昌幸は戦国大名として自ら築いた上田城を後にする。幸村は、武将として生きる道を断たれ、蟄居という形に父とともに九度山での暮らしが始まりました。



真田昌幸画像 上田市立博物館蔵

武田信玄に重用された真田幸隆の三男・昌幸は、長篠の合戦において兄二人が戦死し、家督を継いだ。武田氏滅亡後、織田、北条、徳川、上杉、豊臣...と服属の符を替えて戦国を生き抜く。家康が最も恐れられた男とされている。

武田信玄に重用された真田幸隆の三男・昌幸は、長篠の合戦において兄二人が戦死し、家督を継いだ。武田氏滅亡後、織田、北条、徳川、上杉、豊臣...と服属の符を替えて戦国を生き抜く。家康が最も恐れられた男とされている。

武田信玄に重用された真田幸隆の三男・昌幸は、長篠の合戦において兄二人が戦死し、家督を継いだ。武田氏滅亡後、織田、北条、徳川、上杉、豊臣...と服属の符を替えて戦国を生き抜く。家康が最も恐れられた男とされている。

武田信玄に重用された真田幸隆の三男・昌幸は、長篠の合戦において兄二人が戦死し、家督を継いだ。武田氏滅亡後、織田、北条、徳川、上杉、豊臣...と服属の符を替えて戦国を生き抜く。家康が最も恐れられた男とされている。

武田信玄に重用された真田幸隆の三男・昌幸は、長篠の合戦において兄二人が戦死し、家督を継いだ。武田氏滅亡後、織田、北条、徳川、上杉、豊臣...と服属の符を替えて戦国を生き抜く。家康が最も恐れられた男とされている。

